岩槻城本丸御殿の復元研究

K03087 関口 陽子

1. はじめに

1-1研究背景と目的

明治4年まで存城していた岩槻城は、現在城址公園として整備されているが、現存する遺構もあり、建築史的、都市史的に貴重な史料として評価できるものである。

特に、岩槻城は城地と城下町を堀がとりこむ全国でも珍しい総曲輪型城郭で、16世紀に整備された。わずかに残る中世遺構部分から後北条氏時代の様子を知ることが出来るのは大変貴重である。

また、江戸時代に入ると将軍の日光社参の際の宿泊地として重要な役割を果たしているが、将軍の宿に本丸御殿が利用された。本丸御殿は普通、城主の居館とされるが、岩槻城の城主は三の丸に住居を設けた。このように稀有な要素を持つ岩槻城本丸御殿は復元する価値あるものであるといえる。

現在、全国各地の城郭が復元再建・再建中・計画中となっているが、再建されたものを見ると、門や石垣を除けばほとんどが天守や櫓であり、御殿の再建は数える程度しかなされていない。

そこで今回の研究として、岩槻城本丸御殿の復元研究を行なうことにより、殿舎建築の価値を見出すとともに、宿泊地として利用されていた岩槻城の姿を明らかにする。

1-2研究方法

① 岩槻城、城下町に関する史資料、絵図を収集する。

② 地図（国土地理院）、絵図（岩槻城惣絵図）を基に江戸～現在までの岩槻市域の都市形成の変遷を見る。

③ 岩槻城本丸御殿絵図（長野県上田市立博物館所蔵）、『匠明 殿屋集』、現存遺構である岩槻城旧三の丸居宅門（黒門）を参考に復元を行う。

2. 岩槻城について

2-1岩槻市（現さいたま市岩槻区）の都市形成

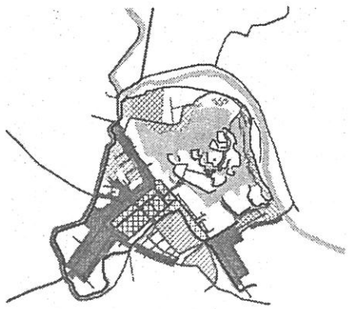

図1. 江戸後期（1751～1780）の岩槻

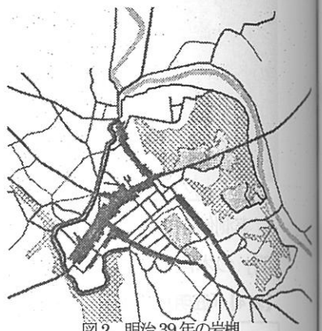

図2. 明治39年の岩槻

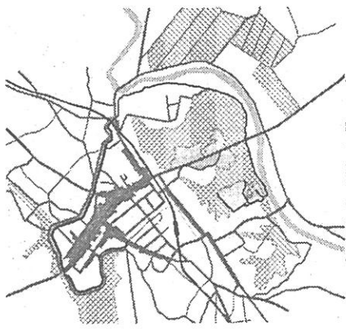

図3. 大正13年の岩槻

図4. 昭和28年の岩槻

図5. 平成18年の岩槻

図から都市の変遷を見てみる。

①江戸後期～明治39年（図1、図2）

明治に廃城となり、跡地は田畑として利用されるようになった。本丸跡地を突き抜けるように走る大宮・粕壁道（現在のさいたま・春日部道）は明治21年に開削され、それに伴い元荒川に岩槻橋が架橋された。

②明治39年～大正13年（図2、図3）

町の規模の変化はほとんど見られないが、大きな変化として大正13年に開通し、たった15年間で営業停止となった幻の鉄道、武州鉄道がある。

③大正13年～昭和28年（図3、図4）

大正から昭和にかけて耕地整理等が進められ、鉄道、道路、河川、都市に変化が見られる。

昭和13年に運転停止となった武州鉄道に代わり、昭和4年に開通した総武線（現在の東武野田線）が走っている。道路に関しては、昭和8～12年、岩槻町耕地整理組合によって、都市の近代化を図るという都市計画事業が施行された。それによる整備後の道路の様子が図4からよくわかる。また、巾着を描いていた元荒川の改修も大正期にされている。

④昭和28年～現在（図4、図5）

昭和29年、昭和48年に出された都市計画により、沼沢地が宅地化され、国道122号バイパス、同16号バイパス、東北高速自動車道(図6左下)が建設され、衛生都市として大きく発展した。しかし、これによって岩槻を取り囲んでいた大構はほとんど姿を消した。

2-2岩槻城の概要

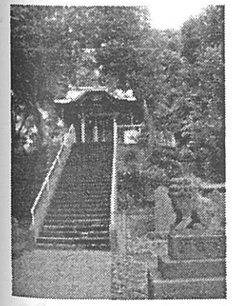

写真1. 大構上にある愛宕神社

荒川（現在の元荒川）右岸の台地にあり、川と沼沢地、西南に連なる台地を利用した平城である。北から東は川を自然の堀とし、西から南には城下町も含む土居（大構）をめぐらした。本丸（2706坪）、二の丸（2724坪）、三の丸（1万8996坪）の曲輪を中心に、天神曲輪、御茶屋曲輪、竹東曲輪、竹沢曲輪、城米蔵があり、沼をはさんで北西には新正寺曲輪、南東に鍛冶曲輪、新曲輪と、多くの曲輪から成る、曲輪内総面積3万2900坪の規模の大きい城郭であった。

築城者、築城年は不明であり、通説では長禄元年（1457）太田道真・道灌父子により築城されたとされている。しかし、最近の研究では、忍城城主成田顕泰の父成田自耕斎正によって文明9年（1478）に築城されたのではないかとする説が有力となっている。

2-3現存する遺構

大構跡　北条氏房により防衛目的に構築したもので、土塁・堀・道から成り、領民は『岩槻の金屏風』と自慢していた。当時8kmあった大構は現在、愛宕神社付近、富士宿町付近のみに跡が見られる程度となっている。

黒門　旧大手門であり、戦前までは県庁、知事公舎の正門として使われていた。昭和45年に城址公園に移築された。この他城門として残っているものは、三の丸裏門（公園内）、本丸車橋門（岩槻区長宮　遠藤家）、三の丸居宅門（岩槻区大野島　絵野沢家）がある。

時の鐘　寛文11年（1671）

城主阿部正春によって鋳造され、武家地と町人地の境である渋江口に設置されていた。現存するものは享保5年(1720)に改鋳されたもので、鐘楼の躯体は嘉永6年(1853)に立て替えた時のものである。

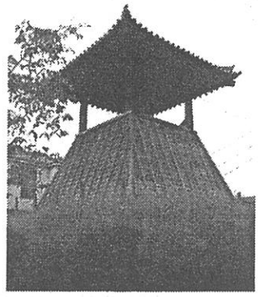

写真2. 時の鐘

2-4史資料から見る本丸御殿の推移

本丸御殿の推移について詳細は明らかになっていないが、慶長14年（1609）の大火災により、本丸御殿を含む城の大部分を消失した。その後、鷹狩に来る家康のため、城主高力忠房は、三の丸居宅を直ちに復興させたが、本丸は空き地のままであった。それ以降の本丸御殿の様子を知るものには、以下の資料がある。

① 従丹州亀山武州岩附江御所替被蒙仰候一件（松平家文書）

貞享3年（1686）に松平忠周が丹波亀山（京都）から入封した際のもので、法度書などがことこまかに書かれている。この文書中に、前藩主の戸田家から松平家へ本丸広間、同所玄関、御門などが引渡されたことに関する記述がある。

指導教員　伊藤　洋子 教授

したがって、これより以前に本丸御殿が再建されていたことがわかり、再建年代は、1609 年～1686 年の間であると推定できる。

②本丸御殿絵図（写真 3）

この絵図は、松平忠周在城期に描かれたものである。南西に一重御櫓、南側には二重御櫓が設置されている。岩槻城に天守閣が設けられたことはなく、その代わりにこの櫓から敵情を視察し、戦闘の際にはここから射撃をした。二重御櫓の向かい側に、“御成御門”とあるが、これは将軍のための門である。つまり、この頃すでに岩槻城が将軍御殿となっていたということを表している。

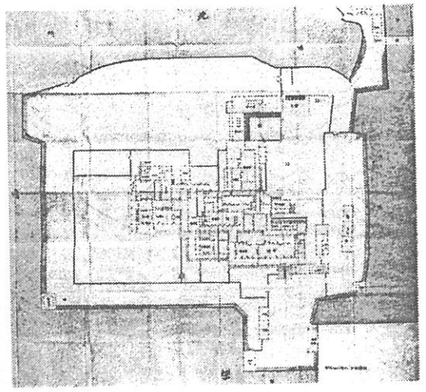

写真 3. 本丸御殿絵図(上田市立博物館所蔵)

③ その他史料

この他、岩槻城に関する史料はいくつか残されている。『享保日光抄録』（内閣文庫）は、享保 13 年（1728）の日光社参の様子を書き表したものであるが、直前に本丸御殿は火災に遭い、「此城先年焼失已後小屋掛同然」の普請であると述べられている。『岩槻城惣絵図』(永島家文書)は城下町も含め描かれたもので、天明 1 年（1781）以前の絵図であると比定されている。この絵図によると、本丸部分は「此所先年　御成御殿有之由」とあり、明地になっている。また、1804～1818 年に書かれた『遊歴雑記』には「城内天守台は東北の方にありて今石垣のみ残れり」とある。

以上のことから岩槻城本丸御殿は、1600 年代に数度の日光社参において将軍の宿館として利用された。のちに火災に遭い、その後は再建されることなく廃城となったと考えられる。

表 1. 岩槻城に関する歴史年表

年代	岩槻城
長禄元年（1457）	対古河公方の戦略拠点として、扇谷上杉家の重臣太田氏によって築城(一説)
天正 12（1585）～同 16（1589）	豊臣氏との戦いに備えて修復、拡大し、防衛強化する
天正 14（1587）	大構の普請
慶長 14（1609）	大火災によりほとんどが焼失したが、三の丸は直ちに復興
元禄 6（1693）	三の丸曲内輪内に新たな城主居館造営
～享保 13（1728）	本丸が再び焼失。御成門、櫓、土居は維持。
明治 4（1871）	廃城
明治 6（1873）	民間に払い下げ
明治 11（1878）	建造物の解体

3．類例殿舎建築

江戸時代における書院造りの住宅は、武家住宅と公家住宅に大別され、岩槻城殿舎は、将軍や藩主の居館であったため武家住宅に属する。その遺構としては、名古屋城本丸御殿表書院・同上洛殿（ともに戦災により焼失）、二条城本丸御殿表書院・黒書院、喜多院客殿（川越市）が挙げられる。喜多院客殿は寺院であるが、その前身が江戸城内にあったという可能性が高い。これらのうち、前者は、大名居館の遺構であり、後者は江戸幕府関係の遺構である。岩槻城殿舎は両方の性格を持つが、特に本丸御殿は、主として将軍の居館に利用されたということ、また、岩槻は、川越とともに江戸城の要塞であったということから考えて、喜多院客殿と似た形式を持つと考えられる。

4.『匠明　殿屋集』その他による復元

本丸殿舎の史料は平面図以外にない。そこで、表 2 により、同地域にある川越喜多院多宝塔の木割が、『匠明塔記集』の木割に近似することから、復元は基本的に『匠明　殿屋集』を参考にすることとする。

『匠明』は江戸幕府大棟梁の平家内伝来の木割書で、全五巻からなり、慶長 13 年（1608）に平内正信によって書かれたものである。したがって、1600 年代に建造されたこの御殿も匠明を基に設計されている可能性があるといえる。

表 2. 川越喜多院の多宝塔と『匠明　殿屋集』の木割比較

名称	匠明塔記集の多宝塔		喜多院多宝塔
下重柱間	丈六	16 尺	16 尺
柱太さ	6/100(a)	0.96	0.95
内法長押成	6/10a	0.576	0.55
縁長押成	6/10a	0.576	0.55
上重柱間		8	8
柱太さ		0.8	0.8
柱長さ		2.8	2.8
長押成		0.48	0.48
地槿勾配	4寸勾配		4寸勾配
飛檐槿勾配	2.3 寸勾配		2.3 寸勾配
野地引通	7.5 寸勾配		7.5 寸勾配
野地屋たるみ	5/100		5/100
茅負反り		0.96	0.95

『匠明　殿屋集』によると、広間の柱は柱間の 1/10 とあるが、今回、柱太さは岩槻城の現存する遺構である黒門を参考にし、柱太さ 5 寸とする。これを基準とし、その他の部材を『匠明』を用いて算出した。また、柱間の長さは、6.3 尺として復元を行った。

5．結び

岩槻城本丸周辺は堀も埋め立てられ、現在住宅地になっている。復元された本丸殿舎は所領数万石の岩槻城主でなく、日光参内の徳川将軍のためのもので、広い式台や遠侍、巨大な炊事場、浴室など、諸設備の整った殿舎であることがわかった。一方、現存する出丸には後北条氏時代と推定される「障子堀」が保存されており、またわずかであるが「大構」も残存し、東京近郊で、中世の騎馬戦力時代の城郭施設を知ることのできる貴重な遺構といえる。

「障子堀」は現在に活かされ、都市公園の一部になっているが、失われた本丸の大型殿舎についても何らかの形で復興させることができれば、他の城郭遺構にはあまり見られない、中世―障子堀、近世―大型殿舎の対比によって、価値ある歴史遺産になる可能性がある。今後、岩槻区内に残る近世から近代にかけての町屋建築とともに、学術調査による活用がなされることを期待したい。

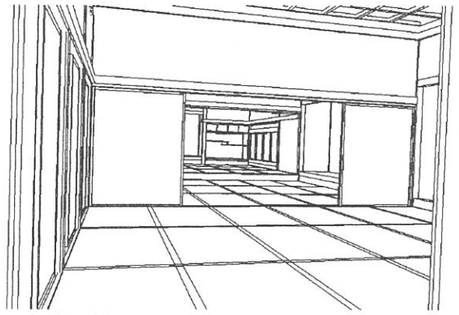

図 6. 本丸御殿内観パース

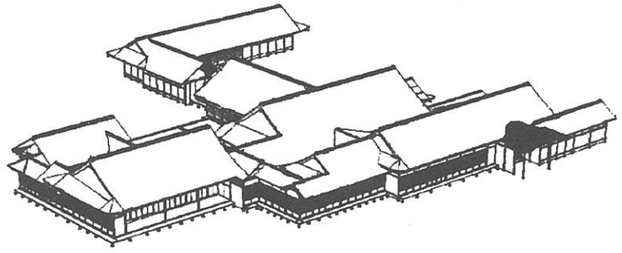

図 7. 本丸御殿外観パース

【参考文献】

・『岩槻市史　通史編』岩槻市
・『岩槻市史　近世資料編　藩政史料（上）』岩槻市
・菊池丕ほか著『岩槻城と町まちの歴史』聚海書林/1987
・『岩槻郷土文庫第三集　岩槻城と城下町』岩槻市教育委員会/2005
・『日本建築史基礎資料集成 17　書院Ⅱ』中央公論美術出版/1974

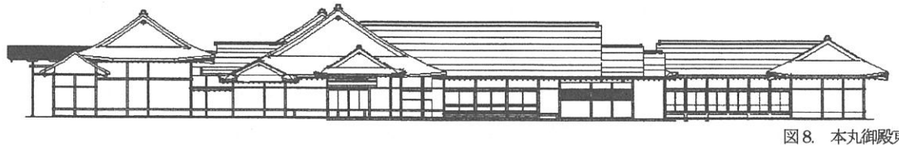

図 8. 本丸御殿東立面図